夜のお菓子

千颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜のお菓子

【Ｎコード】
Ｎ０８４２Ｘ

【作者名】
千颯

【あらすじ】
「雨」の続編。和葉を中心に織り成す、大人の恋愛。七夜連続。

一夜目　工藤新一（前書き）

「雨」の続編

一夜目　工藤新一

「ちょっと新一！どこ行くのよ！」
「どこだって、いいだろ？何でそんなに怒るんだよ？」
「・・・勘よ。」
「何の？」
「女の勘よ！宮野さんとまだ切れてないの？」
「何言ってるんだよ。ただの飲み会だよ。飲み会。今日は遅くなるから、もう家に帰れよ。」
「・・・待ってる。新一が帰ってくるまで、ずっと待ってる。」
「勝手にしろ。」

はぁぁ。何であんなに疑り深いかねぇ・・・。

「そりゃ、アンタのせいやろ？」
「言うじゃねぇか。」
「ふふふ。」

オレは女を黙らせるようにキスをした。

「オメーも共犯だろ？」

カラン
グラスの氷が音を立てた。

オレの膝の上に座った女が、おかしそうに笑う。

「頭がいい人の考えることは、アタシにはわからんわ。」

オレはその白い首に口付けしながら、女に問う。

「で？」

「何？」

「服部はどうした？」

「誰かさんがサボってるおかげで、依頼が立て込んで。」

「ほう。」

女の服の下から、手を滑り込ませる。

「ひゃんっ。やめっ・・・」

「依頼が立て込んでどうした？」

「・・・今日は帰らんって。」

「それじゃあ・・・・」

女を抱きかかえた。

「時間を惜しんで、たっぷり楽しもうか。和葉。」

「ふふふふ。そやね。」

和葉がオレの首に手を回して、絡めとるようなキスをしてきた。

「煽るなよ。」

「そう？工藤君は元気やけど？」

「言ってろ。」

オレはその滑らかな肌に手を滑らせる。

和葉の瞳が妖しく揺れた。

オレの快楽の宴が始まる。

一夜目　工藤新一（後書き）

和葉と密会するために、色々策を弄する工藤。

二夜目　黒羽快斗

ひゅーーー
上空から急降下する。

いた！

目的物を見つけて、そこへうまく着陸する。
「お待たせしました。」
フェンスに寄りかかって夜景を眺めている背中に声をかける。
「ほんまや。」
女が笑いながら振り向いた。
オレは肩を竦める。
「なかなか、やっかいなドーベルマンがいたものですから。」

くすくすくす。
目の前の愛おしい女が笑う。

「噛み付かれたん？」
「いいえ。」
近寄って改めてその顔をみると、いろんな感情が溢れてきた。

ふわっ。
その華奢な体を白いマントに隠す。

「・・・会いたかった・・・。」
「アタシも・・・んっ。」

そのまま激しいキスをかわし、その体を抱きすくめる。

「どして・・・。」
「ん？」
「どうして、キッドの時に、いつも会いにくるん？」
「あぁ。キッドの時だと、邪魔しそうなやっかいな奴等が全員揃うだろ？それに・・・。」

バサッ
変装を解く。
「同士は、協力してくれるからさ。」
「快斗・・・。」

オレはまた、その柔らかい唇を貪るようにキスをする。

「はぁっ・・・んっ。」
「どうする？どっか行くか？それとも・・・？」
「・・・ここで、えぇ。」
「了解。」

オレ達は笑って、またキスをした。

「んっ。」
和葉が小さく喘ぐ。
オレはまた彼女に溺れる。

かりそめの恋人達の戯れを、ただ月だけが見ていた。

二夜目　黒羽快斗（後書き）

同士（工藤&白馬）の協力＝対平次網

三夜目　白馬探

「では、僕はこれで。」
「もうかい？久しぶりだから、もっと・・・。」
「すみません、お義父さん。今日中に仕上げたい論文があるものですから。では、智美。あとは皆さんとゆっくりしてきなさい。」
義家族の前で、完璧な夫を演じきった僕は、このホテルのエレベーターへと、ほぼ駆け足状態で急ぐ。
・・・早く、早く。
かなりスピードのあるエレベーターなのに、その時間すら、もどかしい。
チン
軽快な音がして、扉が開いた。
ここは最上階。
僕は早足で奥にあるエグゼクティブルームに入った。
予想に反して、中には明かりが灯っていない。
「まだ来てないのか・・・？」
そう呟いて、明かりをつけて、僕は足を止めた。
僕の唯一愛する女性が、妖艶にソファーに腰掛けている。
「お帰り、探。」

「ただいま、和葉。」
彼女が笑う。
この笑顔を見るために、僕は生きていると言って過言ではない。
「明かりくらいつけたらどうですか？」
彼女は僕の問いには答えず、悪戯っぽく微笑んで言った。
「探にしては、悪どい事やったなー。隣、自分等の部屋やろ？こんなことしてええん？」
僕は苦笑いをしながら、彼女の足元にひざまづいた。
そして、彼女の手の甲に恭しくキスをする。
「・・・和葉が思っているような理由じゃないですよ。」
彼女は、笑いながらさらに僕をからかう。
「そう？隣に奥さんがおったら、萌えるとか、そんなん理由かと思っとったわ。」
「違いますよ。」
彼女が組んだ足を宝物に触れるように丁寧に持つと、その白い脛に口づけをした。
「んっ・・・。」
「移動する時間すら惜しかったんですよ。」
彼女の目を見ながら、彼女の綺麗な足を丹念に愛撫する。
「あなたに会いたくてね。和葉。」

はぁっ・・・
彼女の息が荒くなる。

「・・・僕の目を見て。和葉・・・。」
「やめっ・・・。」
「今日も寝かせませんよ。覚悟してください。」

僕は彼女を抱きかかえると、寝室のドアを開けた。

「探・・・。」
「和葉。愛してます。」

僕の唯一の至福の時が始まる・・・。

三夜目　白馬探（後書き）

夫婦の部屋の隣に和葉を泊まらせた、恋に狂った白馬さん。

四夜目　沖田総司

「ふーん」
俺は面白くなさそうに言いながら、彼女を後ろから抱きしめた。
「今日は俺の気分やったんやね？」
心にもないことを言う。
本当は嬉しいのに。
呼び出しがあった時から、浮ついて何にも手につかなかったのに。
俺は拗ねた振りをしてしまう。
「そやなぁ。」
彼女はのんびり笑って、俺を振り返って、手を伸ばした。
しっとりとした感触が、俺の頬を包み込む。
それだけで、俺の体は震えてしまう。
「最近、こってりしたもんばっかやったからなぁ。たまには、あっさりしたもんが食べたくて・・・・って感じやな。」
「・・・俺はうどんなん？」
「ちゃう。」
「じゃ、何？」
「和食。」
・・・どっちもかわらん。
本当に拗ねた俺に、彼女がおもしろそうに笑って言う。

「和食は・・・日本人なら、絶対食べたくなるやろ？」
思わず彼女を見つめると、揺れる瞳に囚われた。
「・・・あんま、拗ねる人は・・・ご褒美貰えんで？」
「・・・イヤ。」
俺は彼女の細いうなじに唇を寄せた。
「・・・ほんとは、嬉しかった。」
「ふふ。そう？」
「すぐにでも会いに行きたいくらい、嬉しかった。」
「ほんとに？」
そう言った彼女を強く抱きしめる。
「あっ。」
「本当に。」
甘く耳元で囁く。
彼女が俺の方へ振り向いて、俺を引き寄せた。
「アタシも会いたかったで？」
濡れた唇が俺を捕まえて、柔らかな舌が俺を絡め取る。
それだけで、俺は興奮してしまう。
「・・・なぁ、もう、抱いてえぇ？和葉ちゃん？」
「アタシも・・・。」
「ん？」
「抱いてほしいと思ったとこなんよ。」

「・・・・っ。」
「抱いて？沖田君。」
妖艶に笑った彼女に、俺は魂を奪われた。
・・・俺はきっと一生彼女に囚われ続ける・・・。

四夜目　沖田総司（後書き）

沖田バージョン。もちろん、こってりしたものとは、前三夜の皆様方。

五夜目　国末照明

「和葉ちゃん？」

久々見た彼女は、とても美しくなっていた・・・・・。

「んっ。」

彼女の舌に思わず声を上げる。

ここは、俺のマンション。

俺と抱き合っているのは・・・

昔から大好きだった女の子。

あの事件以来、偶然東京で再会した俺たち。

どこがどうなって、どちらが誘ったのか・・・・。

こういうあやふやな関係になって、結構な時が経った。

「・・・ここ、ええん？」

「うん。あっ・・・・っっっつ。」

彼女の愛撫に、また声を上げる。

昔は女にリードされるなんて、イヤだったのに。

今の俺は彼女になされるがまま。

しかも、それが嬉しいやなんて・・・

「・・・絶対言えんな。」

小声で言った俺に、彼女が笑った。

「何が？」

「何でもない。それより・・・。」

俺は起き上がって、彼女の細い顎を掴む。

「もうそろそろええ？」

「まぁだ。」

くすくす笑う彼女の笑顔は昔のまま。

俺はたまらずに彼女に深いキスをする。

・・・彼女の顔がだんだんと”女”の顔に変わる。

「欲しいん？」

「うん。」

「どうしよっかなぁ？」

妖艶に笑う彼女は、俺が知っている彼女ではない。

俺の心を喰ってしまう悪女。

それでも俺は彼女を求めずにいられない。

「雨月物語みたいになってまうかな・・・。」

「アタシに喰われて？」
「そう。」
「ほな、頂きます。」
「どうぞ。」

・・・残さず喰ってな。

俺の恋心全部。

君があの黒いボウズだけのものに戻っても、生きていけるように。

それが俺の唯一の願いーーーー。

五夜目　国末照明（後書き）

恥ずかしいお守りの行方の国末照明さん。初めて出してみました。

六夜目　新出智明

「また泣いてるのか？」
窓際に立つ華奢な背中に問いかけた。
「泣いとらんよ？」
彼女が振り向いて、儚く笑う。
「ならいいが…」
僕は彼女にゆっくり近づいた。
窓から漏れる月明かりが、彼女の少女のようなあどけない笑顔を照らし出す。

「何でそう思ったん？」
「…君の後ろ姿があんまりにも寂しそうだったから…。」
僕は彼女の腰を後ろからふわりと抱きしめた。
彼女が甘えたように、僕の手に自分の手を絡めて、僕に寄りかかる。
「寂しい…かもなぁ？」
「そうか…」
彼女が僕に手を伸ばした。
「やから…」
「ん？」
「治して？センセ。」

僕は優しく微笑んで、彼女の額にキスをした。
瞼…頬…鼻先にキスの雨を降らす。
「…気持ちいぃ…」
彼女が小さく笑った。
その可愛い唇にも啄むようにキスをする。

「んっ」

小さく声をあげる彼女が愛おしくて堪らない。

「寝室に行こうか？」

「うん。連れてって？センセ。」

彼女が甘えて僕に手を伸ばした。

「何？その手？」

「抱っこ。」

「はいはい。」

僕は苦笑いしながら、彼女を抱きかかえる。

「まるで、大きな赤ちゃんみたいだ。」

「その赤ちゃんにやらしーことすんの、誰なん？」

「僕。」

「ふふふ。」

彼女を抱きかかえて、寝室へ運ぶ。

「あぁっ・・・・。」

しゅるっ

衣擦れの音と彼女の声が響く。

「センセ…」

窓から差し込む月の光が、彼女の白い体をますます美しく輝かせる。

「やっ…」

彼女が顔を腕で隠した。

「何が？」

問い返す僕の声が、興奮で掠れている。

「こんなかっこ…恥ずかし…」

「…どうして？和葉。」

彼女の細い肩に口づける。
「こんなにキレイなのに…。」
「いけず…」
「何とでも。」
「んんっあぁ…。」
僕は彼女を優しく優しく愛撫する。
「もっと感じて…和葉…。」
…すべてを忘れるように。

遊び疲れた子どものように、眠りについた彼女に毛布をかけた。
「…疲れたんだよな…。」
彼女の頭をそっと撫でる。

彼の異常な愛を毎日浴びることも、多数の男の熱愛を受け止める事も。

彼女は疲れ果てると、僕のところにくる。
まるで、甘える子どものように。

僕にできる事は、束の間の自由を楽しんで、彼の元に戻る彼女の心を優しく包むこと。
そして…彼女を彼の籠に送り届けること。

眠りについた和葉の寝顔を十分眺めて、僕は立ち上がった。
そっと戸を閉めて、外からさらに南京錠をかける。

「…。」
この鍵をかける度に、僕の心は暗くなる。

オートロックのマンションなのに、彼が彼女を閉じ込めるためにつけた鍵。
こんな簡単に開けれるのがわかってて、彼が彼女に心理的につけた鍵。

「…おやすみ、和葉。」
ドア越しにそっと呟く。

疲れたらまたおいで。
僕が治してあげる。身も心も。
君がまた笑えるように。

僕はゆっくり歩き出した。
もうすぐ夜が明ける。
でも和葉の夜は今から始まる…。

六夜目　新出智明（後書き）

Ｄｒ．新出。癒しの救世主。

七夜目　服部平次

ガチャ
南京錠を開けて部屋に入る。

オレが一番好きな瞬間。

「ええ子にしてたか？」
「うん。お帰り平次。」
「あぁ。」

微笑むその細い顎を掴む。

「・・・ほんまにええ子にしとったんやろうな？」
「ほんまやで？」
「ふーん。」

いきなり強引な激しいキスをする。

「やっ・・・・・」
「何がなんや？」
「やって・・・いきなり苦しいやん。」

文句を言う和葉に、オレはまた覆いかぶさるようにキスをした。

「んんっ・・・・。」

そのまま服を脱がせ、その場で和葉を抱こうとしたら、また拒否される。

「何や、お前。」
オレは少しいらっとして、問い詰める。
「やって・・・。」
「やってなんや。」
「話聞いてぇな。」
「やから、何や？」
「・・・・この前みたいに・・・、あんま、ひどうせんでな？」
「・・・ああ。」
そういや、和葉この前、失神して、半日起き上がれんかったな・・・。
「・・・善処する。」
「ん。」

和葉が笑ってオレに抱きついてきた。
「アタシも寂しかったんよ？」
「ほうか。」
少し気が落ち着いて、軽いキスをする。
それがだんだん深くなり、和葉が小さく喘ぎだす。

オレはそのくねる白い体に夢中になって、むしゃぶりついた――――。

「やってもうた・・・。」
ベッドにぐったりなって眠る和葉。
また手加減なしに抱いてしまった。

「・・・善処するって言うたんにな・・・・。」
横向きになって寝る和葉の背中には、オレがつけた赤い痕。
それを労るようになぞっているうちに、和葉が目を覚ました。
「・・・へぇじ・・・くすぐったい・・・・。」
和葉の目が妖しく揺れて、オレを捉える。
その瞬間、オレの中の欲望がまた目覚めた。
「やっ！平次・・・やめっ。もう・・・無理・・・・。」
「・・・黙れ。」
「んんっ・・・あぁっ・・・あぁぁぁっ。」

閉じ込めても閉じ込めても、妖しく綺麗になる和葉。
こんなに一緒にいるのに、昨日よりは今日、今日よりは明日、どんどんどんどん和葉に嵌って落ちていく。
他の男も同じように虜にしてしまう・・・憎くて愛おしい和葉。

「お前はオレのもんや。」
今度こそ本当に失神した和葉に呟く。
「お前がどこに逃げようと、どこで息抜きしようと、絶対離さん。
お前は・・・・・。」
オレは和葉の顎を持ち上げ、キスをする。
ずっと・・・オレだけのもんや。一生な。

七夜目　服部平次（後書き）

ラストはやっぱり平次！暗くて若干壊れてますけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0842x/

夜のお菓子

2011年10月10日09時45分発行